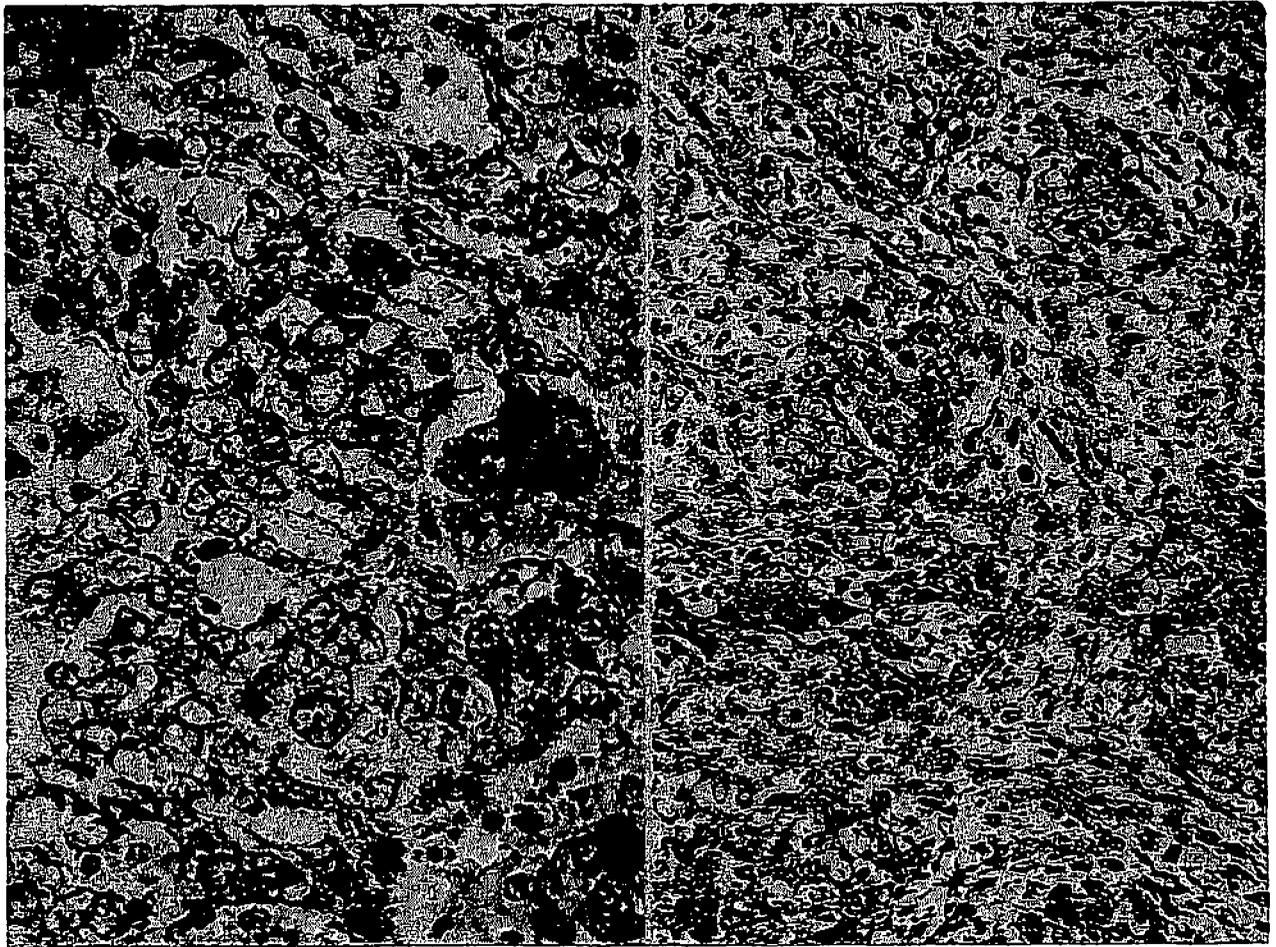


牛アデノウイルス接種によって生じたハムスターの腫瘍

農林省家畜衛生試験場病原病理研究室出題 第8回獣医病理学研修会 標本 No. 119



牛アデノウイルスType III(WBR-I株)の牛腎組織培養17代、培養遠沈上清を乳のみハムスター右肩部皮下に0.1ml接種した。接種後60~70日頃から接種部位に腫瘤が認められるようになり、以後漸次大きさを増した。接種後約100日で致死せしめた。

右肩部から胸壁背部に亙る皮下に、小鶏卵大に達する腫瘤が存在し、皮膚および胸壁から比較的容易に剝離した。表面は硬く概ね白色、光沢を有し、まごころころ赤色を帯びていた。剖面では、周縁は白色密実な組織からなり、若干の小出血巣が散在した。内部は淡橙黄色、脆弱で崩れ易く、中心部に小空洞を形成していた。他の臓器には限局病巣を認め得なかった。

組織所見：腫瘍の内部は大部分が壊死に陥っており、腫瘍組織は辺縁に限局して存在した。この腫瘍組織は、均一な組織構成をとっていないが、基調となる組織では大型類円形の淡明な核を持つ多角状の細胞が胞体突起によって連絡し不規則な配列を示して密集し、ときにシ-

シウム様となり巨細胞が散在した。(写真左)。核分裂像も高頻度にみいだされた。銀線維は密で細胞間にも分布し、細胞巣間に狭窄された多くの毛細血管腔が存在した。このような組織とともに、細胞構成が粗な部分が存在した。こゝでは、概して紡錘形の細胞が胞体突起によって網状の構造を形成し、このなかに小血管を取り囲むように前述したような類円形淡明核細胞が巣状に増数し、島状の分布を示した。(写真右)。

本腫瘍は皮下未分化間葉に発した腫瘍と考えられ、腫瘍組織は、一断面時において、類円形淡明核大型細胞の増殖巣とその間を埋める紡錘形細胞とから構成され、巨細胞の出現も認められることから、多形細胞肉腫と診断された。

本例の腫瘍では転移巣は認め得なかった。また、腫瘍組織に壊死が非常に強いことと、骨髓、肝、脾、リンパ節の組織像における骨髓様化生とみなされる変化の存在が注意された。